

WEB 版「建築討論」 レポーター報告書

レポーター

氏 名	鮫島 拓
所 属	株式会社国建

建築諸元 わかる範囲でご記入ください

名 称	大宜味村 旧役場庁舎		
設 計 者	清村勉		
所 在 地	沖縄県国頭郡大宜味村大兼久		
用 途	役場分室 村史編纂室	竣工年月	1925 年 月
階 数	地上 1 階、一部 2 階	地 下 階	屋 上 階
構 造 種 別	鉄筋コンクリート造		
建 築 主	大宜味村	施 工 会 社	金城組
構造設計者		設備設計者	

建築概要、特徴、評価する点など (800~1,600 字程度)

ある建築の誕生会 大宜味村 旧役場庁舎の米寿祝が示すもの

平成 24 年 11 月 17 日 沖縄県本島北部にある小さな村で、盛大に誕生会が開かれた。

米寿 88 歳を迎えられたおじいちゃんおばあちゃんらと共に、旧大宜味村役場庁舎を祝う会であった。会には村民はもちろん、県内の多くの建築関係者が足を運んだ。ポスターには人と風景、村の過去と現在がちりばめられ、村を挙げての祝賀会である様子が表れていた。

大宜味村は沖縄県本島北部に位置し、人口約 3000 人の小さな村であるが、日本最長寿の村である。また、古くからモノづくりに長けた地域でもあり、喜如嘉の芭蕉布は国の重要無形文化財として登録されている。旧大宜味村役場庁舎を建てた大工は、大宜味大工という腕のいい職人集団として沖縄県内で活躍していたという。設計者は、清村勉という九州熊本建築家で、大正 9 年に沖縄県国頭郡役所に技手として赴任し、沖縄県北部を中心に多くの RC 造公共建築を手がけた。

近年、全国で多くの近代建築の解体・保存問題に対する議論が起きている。全国では東京中央郵便局、大阪中央郵便局、京都会館など、沖縄では久茂地公民館、那覇市民会館、ゆくゆくは名護市庁舎や今帰仁公民館なども話題にあがるかもしれない。

すべての物が永遠ではないように、建築もまた永遠ではない。建物にも人と同様に寿命がある。健康で生まれるが、けがをしたり、病気をしたりする。そして、やはり老いるのである。しかし、老いてなお生きていく。

建築の保存問題を語りたくないわけではない。建築家や建築を愛する一部の市民が声をあげることがきっかけでしかなく、基本的にはその建物に関わる多くの人が考え望まなければ、保存という価値は意味を成さないだろう。

この会を通してみえるのは、公共とはなにか？という問いであり、それは建築とはなにか？という問いにも繋がる。また、地域性という土台の上に、なぜ残すのか？なぜ残ったのか？という現在の機能性、さらに過去と未来に対する時間性を併せた視点が浮かび上がるだろう。

「残すこと」が目的ではなく、「残っていること」にこそ、真に思考すべき価値と意味があるのではないか。

旧大宜味村役場庁舎は戦前に建築された。幾多の雨風に耐え、大戦を経て、88 年に亘り建築として「残っている」。実際には、新庁舎の完成以降、一時的に使われなくなり解体の意見も出たという。しかし教育委員会や商工会の事務所、現在の村史編纂室など用途を変え、建具を変え、仕上げを更新しながら立ち続けている。常に人の手に触れ、変化し、成長しているかのように。

建築の誕生会と聞けば、建築を擬人化したような一見奇抜でファンタジックなイベントに見えるかもしれないが、はて、そもそも建築は生き物ではなからうかと思わせられる。文化財という“ブランド”を掲げずとも、寡黙に、しっかりとこの地に立っていると感じさせられる。これは大宜味村という地域と、そこに住む人々がつくりあげた文化なのだと思ふに落ちた。

大宜味村には、“人材を以て資源と成す” “進取の気風”、という村風があるという。ここでもまた、全国に先駆けて先進的な試みを実行したのだ。

さらに、この企画が建築に携わるもの手に拠るのではなく、イチ行政職員（農業！）の声掛けに端を

発し、様々な人々を巻き込みながら成ったことが、公共とは何かという問いの、ひとつの答えである気がする。企画者自身も「人間が造った建造物には命が宿っていると思う」（旧大宜味村役場庁舎 米寿祝記念紙 編集後記 米須邦雄 より引用）と建築の生命を感じ取っている。

最後になったが、イベント自体も大変盛況なもので、記念式典にはじまり、祝賀会、シンポジウム、資料展示、記念碑の設置、チャリティー上映会に、建築士会の折り紙ワークショップ、琉歌、エイサー、紅白まんじゅうづくり等々、世代を超えた様々な取組みが行われた。

たった一つの建築を介して、人、もの、歴史が混じり合うとても豊かな文化が育まれていることに心から感動した。

建築の保存運動と同じ目線で見られるかもしれないが、私は全く別の次元のものだと捉えている。大切な建築を祝う、ただの誕生会である。

誕生日おめでとう！



写真提供：山口直樹（DEEokinawa）、一部筆者撮影